

〔調査報告〕

パラグアイにおける伊藤勇雄一族 (3)

—— イグアス移住地での生活と意識 ——

三須田 善暢*

キーワード 移住、伊藤勇雄、パラグアイ、日系人社会

4 第3世代——40歳代-50歳代の子ども・孫たち(続き)

4.3 D氏

【生活史、家族構成、農業経営】

D氏の父はエソ夫人の兄で、勇雄の娘と1958年に結婚して外山開拓に従事したのち、勇雄家族とともに42歳でイグアスへ移住した人物である。ちなみに、エソ夫人もそうであるがD氏母(勇雄娘)も当初南米行きには反対であった。しかしそうしたなかで夫のD氏父が「[勇雄さんが南米へ]69歳になっていくというのは何かがあるに違いない。自分は[勇雄に]ついていきたい。それに[勇雄さんが]一人ぼっちになるとかわいそうだ」といったので移住に従ったという(D氏母談)。D氏父はパラグアイでは特に公職はつかなかったものの勇雄のあつい信頼をうけており、大工仕事の得意な人物であった。

勇雄の外孫となるD氏は1964年に外山で生まれている。1968年にパラグアイへ渡り、その後妹がパラグアイで生まれている。働きながら経理の勉強をしていたD氏は、岩手県費による岩手への留学をしたのち、エステ大学サンタリタ分校の夜学に進学して経営学(組合経済論)を学んだ。しかし、在学中に農協の組合長になったことから多忙となり、大学は中退している。このように、若いころからリーダーと目されてきた人物であり、2010年のイグアス市長選でも周囲から出馬を取りざたされたほどである。もっとも、周囲の期待は高いものの、10年ほど前には、農協副



写真13 イグアス入植50周年記念祭でA氏を表彰するD氏

組合長との路線の対立と周囲からの批判により組合長を辞任してもいる。これは別言すれば、D氏の理念・ビジョンは後述するようにある意味“強烈”であるため、敵対する人も多いということである。農協を離れた後は政治の世界に力点を置くようになり、2006年の1年間と2010年から現在までイグアス日本人会の会長を勤めている(会長の任期は1年(写真13))²⁵⁾。

2011年で47歳となるD氏の家族構成は、父と母(イグアス婦人会長を経験)、妻(現イグアス婦人会副会長)、長男(東京農大を卒業後パラグアイへ帰国して家の農業を手伝う)、長女(エステのカトリック大学に在学中)である。

D家は現在340haほどの農地を所有し、C氏から100haほど、G氏から50haほどを借りている。人夫は15人ほど使用しており、固定給+

* 岩手県立大学盛岡短期大学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

能力給で雇う。親子での人夫もいる。D氏は人夫との関係について「1世の人は下層の人としかつきあわなかった。だから1世は、“現地人は泥棒だ”とみなすようなつきあいしかできなかった。しかし今は大学にいつている現地人もいる。信頼できる人も多く友だちづきあいも可能だ」と述べる。

農地では大豆等を作付けしている。そのほか養蜂もおこなっている。ただし出荷するほどの規模ではない。青年海外協力隊員がイグアス周辺で進めているプロジェクトに養蜂があるのだが、D氏によるとイグアスでは通年で花が咲いているわけでもなく、また蜜がない花も多く、くわえて養蜂に利用するアフリカミツバチは獐猛のうえあまり採蜜をせず年1回しか収穫できないというように、養蜂の条件はいいとはいえない。

【久保田組合長からの薫陶】

イグアス市長候補に取りざたされるようになったほどの、D氏のリーダーとしての素質を開花させた人物は何人かいるが²⁶⁾、地域経営の面で大きな影響を与えたのは前々稿(1)で述べたイグアス農協組合長の久保田氏である。彼がD氏の素質に目を留め、自分の部下として農協で育てたのであった。久保田氏はイグアス農協の進路を製粉加工へと進めた人物の一人であるが、彼は単に工場をつくるだけではなく「次のステップ」のことを考えさせ、具体的には「製粉の次はそれで何をやるか」ということを、つまり、現実的かつ中長期的なビジョンを持つことをD氏にたたき込んだのである。こうした久保田氏からの薫陶が、現在のD氏の理念・ビジョンを、先見的で、一種“強烈”なものにしている。

D氏いわく、久保田組合長のもとで働いていた10数年前は、「俺は久保田さんの立場に〔先見的すぎて〕ついていけない」と思っていたという。しかし今は逆にD氏自身が周囲から「Dの考えは〔先見的すぎて〕分からない」といわれることがある。具体的にどういう先見性なのかは以下述べていくとして、D氏の理念・ビジョンを先取りしていえば、一族だけあるいは日系社会だけの発

展を考えるのではなく現地社会全体の発展をも考え、そのためには日系人のみならず現地人の人材育成と経営基盤の確立にも力を注ぐというものである。これは、現地人を信頼しない傾向の強い1世からすれば先見的である。

しかし、その先見性が周囲との軋轢も生んでしまうことになり、それが農協組合長を辞任する一因にもなっている。そのためか、D氏はB氏同様、現在の農協経営についてはかなり批判的である。D氏は「製粉工場はあちこちにあるが、小麦粉が足りない。それに人件費もかかる。……製粉の次に何をやるかを考えないといけないのに、しかし、〔久保田氏が提起した〕13年前の段階で〔構想が〕ストップしてしまっている」と述べる。前々稿(1)でも述べたように、現在イグアス農協はサイロと製粉工場の増設を検討している。それ自体にはD氏は賛意を示しつつも、販売先や償還の予定等の具体的な計画が不明瞭であり、現在の農協幹部が満足な回答を「誰も答えられない」ことに危機感を覚えている。計画および成果の予測が甘い点を指摘し、そうした点に配慮できる経営感覚にすぐれた人材の不足を嘆くのである。こうした農協批判の点にも彼の理念・ビジョンが読み取れよう。

【地域活動への取り組み——日本人会会長として】

さて、活動の力点を日本人会に移したD氏は、まず治安の維持の強化に取り組むことになる。このために、前々稿(1)で述べたように警察協力委員会による警察等への寄付その他をおこなっている。しかしD氏は、より根本的には地域住民(特に移住者と原住民との)経済格差の解消が必要であると考えている。

経済格差解消のためにD氏は、B氏のところでも述べた「地域振興協会」の活動に、日本人会として参画することにしたのである(D氏は現在協会の会長)。当初この協会は農民のみの集まりであり、経営指導をするには不十分な組織であった。そのため、現地の小農が良質の野菜を作っても、流通・販売の過程で問題があって、十分な利益がえられず経営向上には結びついていない状況

にあった。そこに日本人会がかかわり、状況改善のために資本と人材(流通に関するアドバイザー)の導入が必要だと指摘したのである。D氏の構想は、住民の小規模コミュニティを組合組織にまで引っ張りあげ、そこに日系農協が支援をしていくというものである。そのために、日本人会から2人を地域振興協会の委員(環境保護委員)として当てることにした(B氏もその委員の1人である)。このようにして、協会は移住地周辺の小農の経営・生活を支援し、経済格差を解消しようとしている。その延長に「南東部小規模農協強化計画」、たとえばタバコのマテ茶加工の取り組みなどがあるといえよう。D氏は「加工による付加価値をつけられるかどうかで今後の10-20年が決まる」と述べる²⁷⁾(ただしこの「南東部小規模農協強化計画」は日系農協・JICAが中心となっているので日本人会としては直接関与していない²⁸⁾)。

ここで地域振興協会の活動をやや詳細に述べておこう。イグアス近隣にノエバエスペランサとサントドミンゴという町がある。そこにはJICAの協力隊員も入っており(ノエバエスペランサは養蜂と植林の支援、サントドミンゴは植林とパン工場の支援)、協会も継続的に支援をおこなってきた。まずノエバエスペランサであるが、ここに協会は20年弱ほどの長い期間支援にかかわってきた。この町では仲買人が農産物を安く購入し農産物を高く売りつけるという状況が続いていたため、協会が、日本人が使用する農産物を共同で安価に購入させたのである。しかし、その結果はそこでの農産物である綿の価格が下がるだけであった。そこで次にマンジョカ(=キャッサバ)栽培を奨励・援助したのであるが、これは土地の土壌と合わずに撤退することとなる。その次にオイスカ²⁹⁾との協力で「牛一頭運動」(=子牛が産まれたら隣に分けてあげ牛を増やしていくという運動)に取り組み20頭近くにまで増やすことができたが、住民に牛の管理技術が徹底していなかったため死亡させてしまったり、生活に困って途中で売ってしまったりしたため、協会が思っていたほどの成果には至らなかった。とはいえ、現在ノエバエ

スペランサには酪農グループが残っており、週一回日系人のヨーグルト工場へ牛乳を販売している(もっとも当初は1200リットルのタンクを週3回満たす計画であったが、現時点では週1回しか満たせていない)。こうした試行錯誤を経て3年ほど前に、協会はこの地域の問題の本質が水にあることに気がついたという。協会では井戸を掘る支援に取り組んでいるが、場所によっては地下300mまで掘っても水が出ないところもあって、良質の水の確保で難儀しているのが現状である。

もう一方の町サントドミンゴは野菜生産の地域である。ここでは農産物生産は良好であるものの販売が問題であり、くわえて土壌管理にも課題があった。そこで協会では流通面での指導にくわえ、不耕起栽培をアドバイスした。「不耕起栽培研究会」をつくって緑肥をすすめ、また、トラクターを所持している人は全国人口の1%ほどであることから手作業と小規模な器具・機械での栽培をすすめる方向で支援をおこなっている。

こうした活動のほか、ここでは詳述しないが将来の高齢化にそなえて福祉施設の建設をも日本人会の活動にしていくことをD氏は計画している。この計画にはC氏もかかわっており、前稿(2)で述べたC氏の介護従事者育成プログラム案とも連携すると思われる。

【D氏の理念・ビジョン】

こうした地域活動をおこなっていくなかで、D氏が力説するのは人材育成である。D氏は「農協組合長と日本人会会長になってみて、どれだけ人材が不足しているかに気がついた」と述べる。ではその人材の内実とは何か。一つは経営感覚である。この点は農協批判の箇所でもみたような内容である。もう一つは、広く地域社会のことを考えるリーダーシップである。D氏はブラジルの日系人社会について、一部の経営のみが数万haの大規模で成功し残りが下層に位置しているのではないか、そうした自己利益しか考えない単なるエゴイストのみの社会でいいのか、との危惧を表明する。パラグアイの日系人社会でも大規模経営の

成功者は出ているが、全体がしっかりした生活を送れる移住地になるためにはもっと多くの人々がリーダーシップを発揮しなければならないと考えるのである。

後者の、地域社会のことを考える人材形成という点を敷衍しよう。D氏は、悪化する治安状況からの日系人の保護を重視している。D氏いわく「[人材育成といっても] 一人一人を育てるだけでいいのか？ 一人一人は立派に育つだろう。だが、外部から守らねばならない。外部とは、[パラグアイ] 政府であり、土地なし農民である」。すなわち、地域社会のことを考えると、政府・(土地なしの) 原住民からの治安維持 (= 良好な関係の維持)³⁰⁾ であり、そのための経済格差解消なのである。人材育成と治安維持と地域経営が、D氏の理念においてこのように相互に関連しあっている。

こうした姿勢にくわえて、D氏は、「日本人としての誇りを持つには日本語教育の重要性をアピールしなければならない」とも述べる。「ラ・コルメナ移住地では日常会話が現地語 (= スペイン語・グアラニー語) になりつつある。しかし自分たちもそれでいいのだろうか？ そうではない。日本人としてのアイデンティティを持ちたい。むしろ日本語オンリーではないが、日本語を中心としたバイリンガルにしたい。移住地の子ども



写真 14 イグアス日本語学校での授業風景

もには3-4か国語を普通に話せる社会人になってほしい」。そうした意向の一環として、小学校での日本語教育には力を入れ、毎日の朝礼には国旗掲揚・国歌斉唱をおこなっている (写真 14)。

政府・原住民との緊張関係を自覚し日系人とその社会を教育の面からも守ろうとする姿勢は、それだけを見ると偏狭なものにみえてしまうかもしれない。しかし、D氏の力点は移住地に生きる日系人としてのアイデンティティの重視にあるのだと考えねばならない。既述してきたような、日系人と現地人夫との関係についての認識、原住民との格差を解消しようという姿勢、くわえて、D氏自身グアラニー語が不自由なく使えてグアラニーの友人が多いという事実からしても、偏狭なものとはいえないことがわかる。

このようにD氏の理念・ビジョンは、人材育成に力をいれつつも、個人や一族あるいは日系社会のみの発展を志向するのではなく、逆にそのためにこそ現地社会全体の発展に力を注ごうとし、同時に日系社会のアイデンティティを重視しようとするものだといえる。

4.4 G氏

もう一名、第3世代の人物として勇雄長子息のG氏をあげる。

前々稿(1)で述べたように、勇雄の幼い子どもC氏H氏と同年代であることから、矢巾中学校1年生の時両親と分かれてパラグアイに移住した。移住の際、親と離れるといった悲壮感はなかった。それというのも当時いつもC氏やH氏と遊んでいたからである。ただ、ホームシックにはなった。移住後は勇雄一家の一員となる。家には本がたくさんあったので、寝ころがっていろいろと読んでいた。またエソ夫人の料理はとてもおいしかったためよく食べたので、こちらにきて背が伸びた。当時勇雄家では人夫を2-3人は使っており彼らと一緒に仕事をした。午前中はスペイン語の学校にいき、それ以外は仕事の手伝いや、魚釣りをしたりカウボーイのまねごとのようなことをしたりして過ごしていた。入植して7年目、G氏

が20歳のころに勇雄が死去する。そこで23歳の時に一度日本に戻り、岩手県立農業大学校で畜産の勉強を2年ほどすることになる。その後パラグアイへ戻り、家の農業を手伝う。しばらくしてC氏の勧めもありC氏が通ったのと同じアルゼンチンの学校にスペイン語の勉強にいてもいる。その学校の青年たちも伊藤農場の手伝いに来たことがある。このようにパラグアイ・アルゼンチン間を何度も行き来していたが、その後日本へ10年ほど出稼ぎ（自動車工場）に行くことになる。その当時、パラグアイ人の女性と結婚した。出稼ぎ中は妻の兄弟が家に来て留守番などをしてくれた。しかし、日本で生活するのは大変であると感じ、10年ほど前に出稼ぎをやめて、農業のみで生活するようになる。

G氏は2011年で57歳。同居している家族はパラグアイ人妻(49歳)、長男(20歳)、長女(12歳)、次女(7歳)、次男(6歳)。長男はA氏が人夫として雇っており、また大学にも通って法律の勉強をしている。それ以外に妻の前夫との娘が3人(大学1年、高校3年、高校2年)いて、アスンシオンの農大会館でエソ夫人と一緒に住んでおり、夫人の面倒をみながら学校に通っている。妻と子どもたちは日本語は話せない(小学校にはいくが日本語学校にはいっていない)ため、日常会話はグアラニー語が中心である。

G氏は現在畑を55haほど貸しておりその地代で生活している。ただ、息子が農業をやろうとしているのでいずれ土地を返してもらう予定である。その他に自家用畑が若干ある。畑の地質はいいので時々牛糞をいれるくらいで作物が育つ。くわえて、乳牛を45頭、ニワトリを100羽ほど飼養しており、牛乳はイグアスのチーズ工場へ週に一度販売している。5年前までは手絞りだったが、その後ミルカーを利用するようになった。搾乳は妻と娘の仕事である。ここでは「牛が貯金のようなものだ」とG氏はいう。現在のG氏の仕事は牛を放牧するくらいである。お昼から4時ごろまでは自由にやりたいことをして過ごしている。その生活は、他の親族いわく「仙人のような“世捨



写真15 G家の住居

て人”的生活]である(写真15)。

勇雄から教えられたことは「皆な働いて、生活は皆な同じであれ」ということだとG氏は述懐する。「勇雄は楽園を作りたいという夢をもっていた。そうした夢や信仰を自分も持って暮らしていきたい。勇雄はお金にこだわらない人だった³¹⁾。……自分も儲けることはできない。食っていればいい。普通のパラグアイ人は皆そうだ。……ちょっとお金が入れば無くなるまでのんびりしている」。こう述べるG氏は自家用車は採算が合わないので持っていない(妻の家では牛車を使っている)。今後は、せめて自分が勇雄の墓守をしていかねばと考えている。

G氏は、勇雄の思想における、自然に寄り添う平等な生活志向の側面を受け継いだ人物だといえるだろう。

5 親族以外のキーパーソン

以下述べる人物は親族ではないが、伊藤一族を考察するにあたって重要となる人物であるため、ここに付記したい。

5.1 E氏

【経営概況など】

E氏は38歳、現在イグアス農協組合長を務めている。妻はブラジル人で8歳と5歳の男の子がいる。生まれも育ちもイグアスであり日本に研修に来たことはないが日本語に不自由はない。父と2人で大豆を650ha経営している(うち借地

200 ha。地代は250-300ドル/ha)。そこにトウモロコシ、小麦、緑肥、燕麦をローテーションで栽培している。出荷先は農協である。牛の飼養はないが将来は検討したいと述べる。このように現在の経営の基本は大豆作であるが、大豆に偏重しているので不作であると大変なことになる。今後は複合経営も考えている。人夫は4人使用しており、使用機械はトラクター4台(80-120ps)、播種機3台、消毒機1台、コンバイン2台である。現在の状況であればあと200haくらいは経営できると考えている。現在、農業上でもっとも心配なことは土地がやせていくことである。対策として輪作と石灰散布、およびEM菌に類似したものの利用をおこなっている。

【農協の問題】

農協の問題としては、組合内の人間関係の厳しさであり、端的に言えば組合員をまとめるのが大変だとE氏は述べる。イグアスでも多様な業者が参入してきており、大豆出荷に際しても組合へではなく業者への個人出荷も出てきている。E氏は「組合員が組合を信頼してもらわないと困るんだ」と話す。また、借金の問題などにより農協から離れる者がでてくるとも懸念している。E氏は若い組合長であるが、B氏やC氏のような積極的に拡大しようという姿勢と比較すると、堅実な方針をとろうとしていることが分かる。また組合内の人間関係の調整や組合員離れ、資金回収といった問題に対して苦慮していることがうかがえる。大豆の好調を中心とするものの、それのみでは展望が危ういことも自覚しており、複合経営をイグアス農協の方向性として模索している。

5.2 F氏

【生活史・事業の経緯など】

4人兄弟の長男であるF氏は2011年で34歳と若い。多くの事業にかかわってきた人物である。まず15歳前後(1994-95年)にはスイスへ3ヶ月ほどチーズ加工の研修にいった。これは当時牧場経営をしていた父から、乳牛部門のチーズの品質

を改良してほしいといわれたためである。この研修の際にはヨーロッパ各地を視察している。やがて17歳のときに岩手県費研修で来日する。この際は小岩井乳業で研修をおこない、やはりチーズ部門を担当した。ここで妻(山形村出身)と出会って結婚している。こうした経緯のため、F氏は高校は6年かかっていたの卒業となっている(イグアスおよびイグアス近辺の高校を卒業)。さて、その頃、父のかかわっていた乳製品会社が分裂してしまってチーズをつくることができなくなった。そこでF氏は高校卒業後、チーズとは関係のない仕事を始めて成功し、アイスクリーム屋やディスコなど最大で18店舗を運営する青年実業家となったのである。商売は成功であった。しかし、経営主としては大変な超過労働であった。そのため、妻からは仕事をやめてほしいといわれ、それを契機に「きっぱりやめる」のである。

その後(4-5年前)、来日して岩手で1年間ほど中古車の輸出入関係の仕事に従事した。その後にパラグアイへ戻り、再度起業を試みる。現在までにイグアスにレストランを1店舗開店した。これは自家の畜産をベースにした多角経営の一環である。

【畜産等について】

ここでF家の畜産をみてみたい。現在、肉牛(肥育牛)として500-600頭飼養している。いずれ購入して800頭くらいに増やす予定である。出荷は秋から春までであり、春から夏には休ませて、夏に子牛を仕入れる。また、出荷前3ヶ月間は肥育する(=フィードロット)。購入する子牛は生後7-9ヶ月の物である。それを約1年間(12-15ヶ月)で出荷する。これ以上の日数をかけると赤字になる。いい品種なら10ヶ月で出荷する。品種はアンガスとヘレフォードで、素牛はコブウシ(ゼブー)をかけあわせたものである。なお牛舎に屋根はない。

乳牛はこれから60頭くらいを購入予定である。乳牛の利益はそれほどないのだが、毎日の収入があるのありがたいと述べている。F氏は屠殺場

も運営しており、それからも一定の収入がある。これらをあわせて日々の諸々の費用にあてたいと考えている（肥育牛の収入は半期に一度くらいのものである）。

F家の牧草地は250-260 haほどである。年間2頭/haの計算で放牧している。現在試みているのが、大豆と牧草地のローテーションにより年間7-8頭/ha放牧できるようにする方法である。研究所（CETAPAR）のデータでは1 haあたり15頭ほどまで投入可能となっており、この点はF氏のみならずB氏も興味をもちその技術の進展に期待をかけている。なお、F氏もB氏同様イグアス肉牛部会に参加し相互に切磋琢磨している間柄である。

F家は人夫として、カウボーイ4人、作業員2人、機械整備に1人、屠殺に2人を使用している。うち3人はグアラニー人で残りはブラジル人、ドイツ人である。その他、大工仕事などには歩合制で人夫を雇っている（年間10人ほど）。F家ではほぼ1年中何らかの建築物を造っている（調査時点では牛舎を建築中）。こうした人夫の件費は、F家の全収入のうち5割ほど占める。

これらF家の経営において、F氏は主導的な位置を占めているが、F氏は経営において明確に親世代との違いを意識している。「親の世代はジャングルを倒す仕事に牛を入れていた。とにかく伐根して土地を広げることが大事だった。しかし今は広げること、伐根をする時代ではない。自然保護団体にたたかれる……土地の25%は山林でなければいけない。そうでない場合には[土地の]5%を追加植林するのだが、その木も[成長の早い]ユーカリではだめで、原生林になるような品種でなければいけない。……こうした点をも計算して現在の経営方針を決めた」とF氏は述べている。また、畜産でもフィードロットを採用することで以前とは「1 kgの肉を作るコストが全く違う」ことをも強調する。つまり、親の世代のような環境破壊につながりかねない開墾・粗放的農業ではなく、大豆や畜産との連携により地力を維持していくと同時に、コスト計算には常に気を配り限ら

れた労力・土地で収益を向上させる方向にあるといえる。おそらくこの延長上に、「いずれチーズの技術は使う時が来る」と述べるように、F氏が勉強したチーズ加工も生かされてくるのであろう。

【F氏の経営観・地域観】

このように、F氏は、経営の基盤に農業を置きつつも、（小経営の）農民というより青年実業家という方が妥当とも思われる。F氏自身自分を称して「農家ではなく経営者である」と述べている。さらに、F氏は専門ごとの分業を重視し、経理や法務関係の困難なところは一人でやらずに弁護士や会計士などを雇えばよいとし、「[そうした]専門の勉強をする時間がもったいない。その時間をつかって経営の方法を学びたい」とする。ここには、自らの労働により原野を開墾し理想郷をつくらうといった勇雄にみられる1世の意向はみあたらない。そこにみられるのは、B氏のところで述べたような、高度に分化した職業のなかで経営・管理労働に特化し、収益を拡大していこうとの意向である。

それではF氏は、イグアス移住地あるいはパラグアイの将来についてはどのように考えているのだろうか。F氏いわく、「工場をつくる第一の問題は技術。そのためには人的資源が重要だ。……高校が終わったら自動的に就職できるような仕組みをつくらなければならない。企業のなかでの教育も必要になる」として、人材育成を重視する。また、移住地を発展させるためには「資本がなければ何もできない。外資をいれるしかない」が、そうして導入した産業を「パラグアイは30年で飲み込むはず」だと楽観的に考えている。その背景には「日本はパラグアイの将来であり、見本だ」との想い、つまりパラグアイも日本のように追いつくはずだとF氏の想いが存している。

このように、経営についてはB氏、移住地の将来像についてはD氏と通底する志向をF氏もっている。それはF氏が両者の影響をうけているからでもあろう（たとえば、F氏もイグアスのEXPOを14年前にD氏とともに開始した人

物である)。そうした影響にくわえて、当然ながらF氏のこれまでの起業等の経験が影響してもいよう。

6 暫定的なまとめ

以上述べてきたパラグアイにおける伊藤勇雄の家族・親族の概況をみると、どのようなことが分かるであろうか。

まず、現在の農業経営をみると、多くの人夫に支えられており純粋な家族経営とはいえない。経営主は管理労働に特化しつつあり資本主義的経営に移行しつつあるといえよう。それゆえ、実業家、起業家という印象が強い。この背景にはパラグアイ社会の好景気(インフレ、地価上昇)といった条件もあろう。もっとも、一部にはそういう道ではなく小規模自給的な農業を選択する人もいる(また、一族のなかにはいないが、移住者のなかには経営が芳しくなく移住地を去っていった者も多い)。

とはいえ、こうした安定した経営は、大豆の不耕起栽培成功以後の話である。それ以前の農業経営には相当な苦勞があり、そのことが第2世代までの経営志向・労働観の根本に影響している。そのため、経営観のみならず原住民との関係性についても、世代間の差異・軋轢は強い。そうした世代間葛藤の状況を見ると、一族の結びつきは——確かに強いし、お互いに土地の貸し借りや将来構想の面で協力しあってはいるものの——必ずしも一枚岩とはいいいかねることがうかがえる。

しかし、そのような世代間葛藤を孕みつつも、伊藤一族は狭い自己利益のみでなく地域の全体的発展を考えているのが特徴であるといえよう。それは、不安定なパラグアイの社会情勢のなかでの長期的な戦略によるものと考えられる。日本人・日系人としてのアイデンティティを確保しながら公益・共存を図り、政治の世界にも積極的にかかわってこうとする姿勢に、第3世代以後の新しい性格がみられるといえてよい。しかし、それは勇雄の理念が直接的に影響したものではない。第3世代以後の活動を先行世代と対比する際に、勇

雄は新たに発見され参照されているのだといえてよいだろう。

【付記】

本稿は「パラグアイにおける伊藤勇雄一族(2)」の続きである。当初、相田の優れたドキュメンタリー番組に対する取材対象者からの感想をもとに調査手法についての検討をも試みる予定であったが割愛する。本稿では、ある調査対象者の「[相田氏の]顔もみたくない」という言葉と、C氏による“10年ごとの番組を作るとなると、それにあわせて我々がイベントをするといった感じになってしまった。そうしたことが望ましくないと思って相田さんは取材をやめたのかもしれない”という趣旨の述懐を付記するにとどめておく。

【注】

- 25) 2011年8月22日に挙行されたイグアス入植50周年記念式典も、D氏が中心人物として登場し、日本人会会長として献花と挨拶をおこなっている。
なおこの記念式典はイグアス移住地にあるホールで行われ、300人強の出席者であった。日系人、在パ大使、JICA事務所長、日本人仏教関係者にくわえて、非日系人としては現地の市長、警察関係者、外国人神父などが臨席した。
- 26) D氏は、自己の思想の形成に影響を与えた人物として、久保田氏のほかに、アスンシオン三育学院の教師(宣教師)であった故柴田祐司氏をあげている。柴田氏はC氏にも強い影響を与えた人物である。
- 27) 加工についてのD氏の重視は、日系社会の将来についての文脈でも述べられている。「これ以上、土地は広げられない。あとは技術で生産性を上げるか、生産物に付加価値をつける工夫をして、みんなが生活できる事業を育てていくことが次の目標です。仕事がないと若者がデカセギに行ってしまう」(『ニッケイ新聞』2011年9月14日)。
- 28) こういう状況であるがゆえ、イグアス農協へのD氏の期待は一層強まっている。その反発として不満感が強く表明されているのだといえよう。
- 29) オイスカ(OISCA)とは新宗教をもとに設立された公益財団法人で、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開している。
- 30) 日系人と原住民との関係性が良好ではない近年の一例として、D氏は、3年前の日本人排斥のデモと、イグアス入植50周年の歴史をパラグアイ人が執筆した書籍の記述をあげている。その書籍には、日本人移民が人夫を安くこきつかっている、不法入国のブラジル人

をも雇用している、何か問題が起こるたびに金銭で解決しようとしている等の、「ものすごく悪」い否定的評価が記述されている。この記述についてD氏は、「著者を知っているが、偏狭な考えの人であり、事実認識としても誤っている。日本人は〔原住民と比べて〕勤勉なために当然格差が生じる」のだと批判する。しかし、こうした印象が特に近年広がっているのは確かだ

あり、D氏は「〔日系社会が〕地域に貢献していることを地域の人々が理解してくれるようにならねば」との危機感を表明している。

31) しかし、勇雄自身は、値上がりを見越しての外山での土地確保など、投資については綿密に考えていたと思われる。パラグアイ入植前のインド旅行の費用などもそうした算段により捻出している。

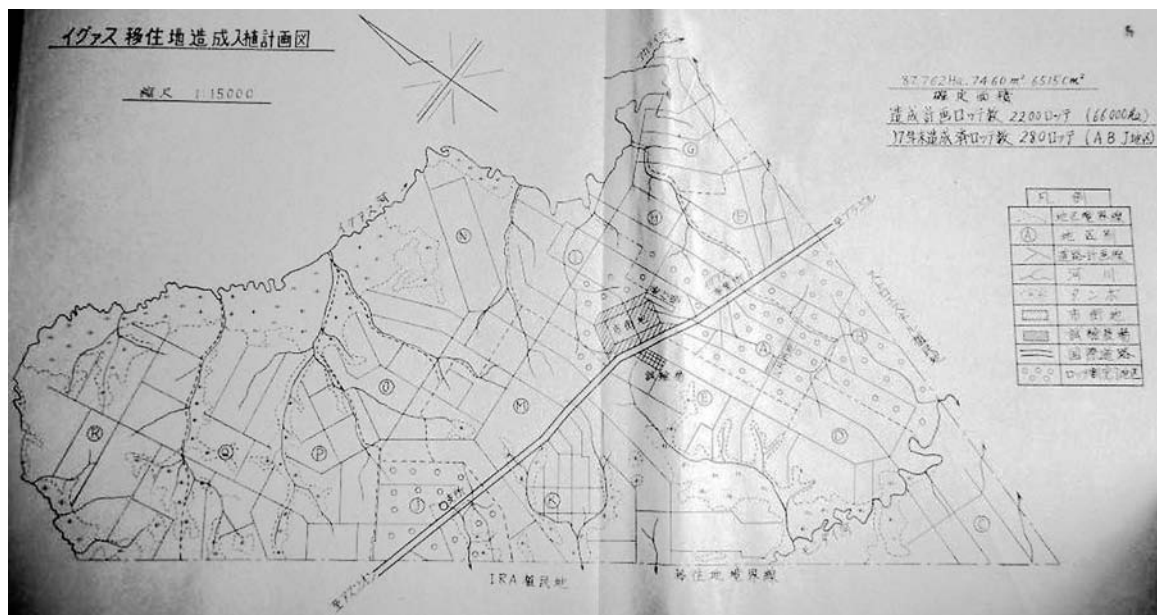


写真 16 勇雄旧居に保管されていたイグアス移住地造成入植計画図
(財団法人日本海外協会連合会、1963、『パラグアイ国イグアス移住地自営開拓移住者募集要領』所収)